edited by dr. masato mugitani
vol.6-no.7

Dessi's Stack

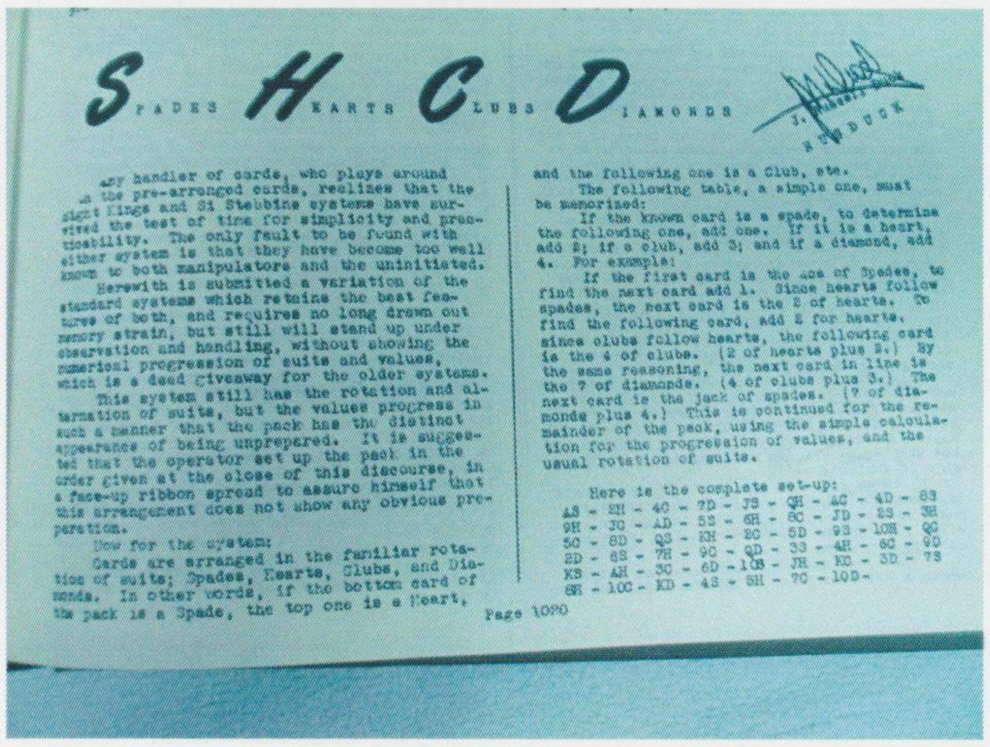
麦谷眞里

（まえがき）日本でこのスタックを紹介するのは、おそらく私が初めてだと思います。このカード・スタック（カード・システムとも言う）を考えたのは、Patrick Dessi というアマチュアのマジシャンでフランスの人です。2000年に考案されて2008年にフランスの奇術雑誌に発表されたスタックです（写真999）。

写真999

実は、このスタックの原理そのものは、例の Rusduck によって、すでに1952年の"Phoenix

no.255"に発表されています(写真1000)。ただ、Dessi 本人は、そのことは2014年になって初めて気が付いた、と言っていますから、たぶん、誰かが教えたのでしょう。Rusduck は、スタックの鬼ですから、この当時、この原理を発表していても不思議ではありませんが、"Phoenix no.255"には原理だけで、このスタックを使った手順などは述べられていません。



S PADES H EARTS C LUBS D IAMONDS

Any handler of cards, who plays around with the pre-arranged cards, realizes that the Slight Kings and Si Stebbins systems have survived the test of time for simplicity and practicability. The only fault to be found with either system is that they have become too well known to both manipulators and the uninitiated.

Herewith is submitted a variation of the standard systems which retains the best features of both, and requires no long drawn out memory strain, but still will stand up under observation and handling, without showing the numerical progression of suits and values, which is a dead giveaway for the older systems.

This system still has the rotation and alternation of suits, but the values progress in such a manner that the pack has the distinct appearance of being unprepared. It is suggested that the operator set up the pack in the order given at the close of this discourse, in a face-up ribbon spread to assure himself that this arrangement does not show any obvious preparation.

Now for the system:

Cards are arranged in the familiar rotation of suits; Spades, Hearts, Clubs, and Diamonds. In other words, if the bottom card of the pack is a Spade, the top one is a Heart, and the following one is a Club, etc.

The following table, a simple one, must be memorized:

If the known card is a spade, to determine the following one, add one. If it is a heart, add 2; if a club, add 3; and if a diamond, add 4. For example:

If the first card is the ace of Spades, to find the next card add 1. Since hearts follow spades, the next card is the 2 of hearts. To find the following card, add 2 for hearts, since clubs follow hearts, the following card is the 4 of clubs. (2 of hearts plus 2.) By the same reasoning, the next card in line is the 7 of diamonds. (4 of clubs plus 3.) The next card is the jack of spades. (7 of diamonds plus 4.) This is continued for the remainder of the pack, using the simple calculation for the progression of values, and the usual rotation of suits.

Here is the complete set-up:

AS - 2H - 4C - 7D - JS - QH - AC - 4D - 8S
9H - JC - AD - 5S - 6H - 8C - JD - 2S - 3H
5C - 8D - QS - KH - 2C - 5D - 9S - 10H - QC
2D - 6S - 7H - 9C - QD - 3S - 4H - 6C - 9D
KS - AH - 3C - 6D - 10S - JH - KD - 3D - 7S
6H - 10C - KD - 4S - 8H - 7C - 10D-

Page 1080

写真1000

日本で知られていなかったのは、原典がフランス語だったからで、それ以外の理由はないと思われます。スタックを見ただけでは法則がわからないかもしれません。なかなかややこしいのですが、Dessi はマルセイユの外科医で、後述するようにそのことがさらに話をややこしくしています。まず、スタックの構成を説明します。

[スタックのメカニズム]

①52枚のデックのカードの並べ方は、♠♡♣♢の順です。

②スペードは先端が尖っているので1とします。

③ハートは丸い山が2つあるので2とします。

④クラブは丸い山が3つあるので3とします。

⑤ダイヤは4辺からなっているので4とします。

⑥エースは1、ジャックは11、クィーンは12、キングは13もしくはゼロとします。

[スタックの並べ方]

最初のカードは何でもいいのですが、ひとつ前のカードによって、次のカードが決まります。そこで、いま、説明の都合上、最初のカードを♠のAとします。エースの1と♠の1を足して2ですから、♠のAの次のカードは♡2です。次は、2と♡(山が2つ)の2を足して、4ですから、♣4です。次は、4と♣(山が3つ)を足して7で、♢7です。その次は、4＋7＝11で♠のJ、さらに、その次は、11＋1＝12で♡のQ, その次は、12＋2＝14ですが、14－13＝1再びエースになって、♣のAとなります。このようにして、52枚並べて行ったのが、前掲の写真999です。このことがわかっていれば、次のカードがすぐにわかるので、たとえば、デックのボトムに♢5が来ていれば、トップ・カード

は、♠9であることがわかります。もちろん、逆も可能です。

さて、考案者の Patrick Dessi は、このスタックのことを C-PAP と呼んでいます。これは、フランス語の"Le Chapelet Periodo-Aperiodeique"の頭文字を取ったもので、直訳すると、「非循環の単位の輪」という意味です。"Le Chapelet"はロザリオのことですから数珠のような輪を表します。スタックは、スート以外は循環していませんので、非循環の一定の長さのカードがロザリオのように繋がっているという意味だと思います。ただし、これは、外科医である Dessi のこじつけで、医療で C-PAP と言えば、通常は、"Continuous Positive Airway Pressure"(経鼻的持続陽圧呼吸療法)のことで、睡眠時無呼吸症候群の治療に使われる器具です。Dessi は面白いと思って名付けたのでしょうが、あまりできのいい洒落とは思いません。

以上を踏まえて、スタックのことはわかりましたが、では、これをどうやって応用するのでしょうか？実は、Dessi は、このスタックを使った ACAAN を"Linking Ring"の2016年12月号に発表しているのです。ハンドリングが面白いので、それを紹介します。

[現象]マジシャンは、赤裏と青裏のデックを示し、観客の1人にどちらか選んでもらいます。選ばれなかったデックは、そのままテーブルの上に置いておきます。選ばれたデックを使って、客の望む枚数とカードを選びます。枚数とカードが確定したところで、選ばれなかったほうのデックを開けて調べると、その枚数目から、客の選んだカードが出て来ます。

[必要なもの]

①赤裏のデック　1組

②青裏のデック　1組

[準備]

赤裏のデックと青裏のデックをそれぞれ、同一の Dessi スタックにセットし、それぞれのデックのボトム・カードをブリーザー・クリンプしておきます。私自身は、何もブリーザー・クリンプでなくてもいいと思うのですが、Dessi は、ブリーザー・クリンプを主張しています。ブリーザー・クリンプは、長い間、ごく少数のマジシャンやギャンブラーだけに知られていて、ほとんどのマジシャンには秘密になっていましたが、1987年ダイ・ヴァーノンの「ロースト・インナー・シークレット」で初めて解説されました。ただし、クリンプとその使い方の説明だけで、手順への応用は書いてありませんでした。

そこで、まず、ブリーザー・クリンプを解説します。

[ブリーザー・クリンプ]

①カードを表向きに両手に持って、左右の親指を上から当てて、カードの中央から対角線上に擦るようにして、親指をカードの隅まで滑らせます。このとき、親指にちょっと力を入れて、対角線上に僅かな筋ができるようにします(写真1001)。

②次に、この同じカードを反対側の対角線上でも、同じことを行ないます。すなわち、親指をカードの中央に当てて、さっきと反対方向の対角線上に、親指を擦り這わせるのです。結果として、このカードを裏向きにしたときには、中央に僅かにテントのような隆起のあるカードになります（写真1002）。クリンプとしてはかなり大きなものですが、方向を選ばないのが優れています。

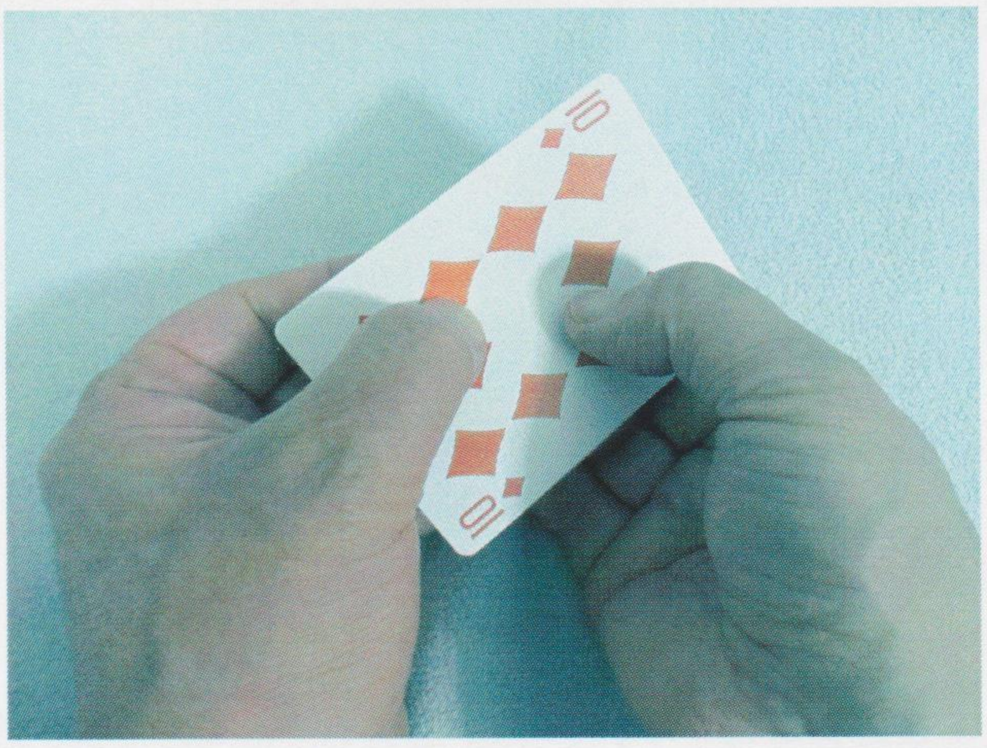


写真1001

写真1002

［やり方］

①観客の1人に、赤裏デックか青裏デックか、どちらかのデックを選んでもらいます。どちらが選ばれてもいいということを強調します。選ばれたほうを使います。ここでは、仮に青裏が選ばれたと仮定します。選ばれなかった赤裏はケースのまま、テーブルの上の観客から見える場所に置いておきます。

②選ばれた青裏のデックをケースから出して、カードの順が変わらないようにフォールス・シャッフルやフォールス・カットを行ないます。実際にカットしても、ブリーザー・クリンプがボトムに来るようにもう一度カットすればデックは元に戻ります。

③「これから、お客さんに1～52の間で、何でも好きな数字を言ってもらいます。ただし、それだと、他のお客さんからは、予め私と選ぶ数字を決めていたのではないかと疑われますので、この

一組のカードから、大雑把でいいですから、何枚か正確にはわからないくらいほど持ち上げてもらえますか？」と言いながら、デックを裏向きのままテーブルの上に置いて、実際にマジシャンの右手で、何枚かのカードを持ち上げるような仕草を行ないます。

④客が理解したら、そのように何枚かのカードを持ち上げてもらいます。ここでマジシャンは残っている左手のカード群を一旦テーブル上に置いて、客が持ち上げたパケットを受け取って左手に持ちます。そして、このパケットの枚数を右手で一枚ずつゆっくりと数えますが、カードの順序が変わらないように、左手のカードを右手のカードの下へ下へと取って行きます。仮に、このカードの枚数が15枚であったとします。「15枚でした。この数字を覚えておいてください」と言います。

⑤いま、数えたばかりの15枚をテーブル上に置いて、この上に、さきほど置いたデックの残りを載せます。デック全体を左手に取り上げて、ダブル・カットでボトム・カードをトップに持って来ます。いま、トップに来たのが、もともとのデックの15枚目のカードです。

⑥ここで、このトップ・カードをフォースするのですが、なかなか面白いハンドリングをします。まず、デックを左手に持って、左親指で、デックの左上隅をリフルしながら、別の客に「お好きなところでストップをかけてください」と言います。これは、実際にどこでもいいですので、客のストップに呼応するようにします。ストップがかかったら、そこでデックを分けます。そして、分けたところから上のカード群を右手にビドル・グリップで持ってデックから離し、左手は、左親指で、分けたところのカードを右へ押し出して、これを右手のカード群の上に受け取ります（写真1003）。すなわち、客のストップのかかったところのカードをデックのトップに持って来たのです。

写真1003

⑦「では、あなたのお選びになったカードは何だったのでしょうか？」と言って、まず、左手に残っているカード群をテーブルの上に置きます。続いて、右手のパケットを左手に置いて、やや揃えながら、左手のパケットのトップ・カードをダブル・ターンノーバーでひっくり返して表を見せます。♣8だったとします。ダブル・リフトで持ち上げるのではなくて、ダブル・ターンノーバーでひっくり返すのです。表を見て、確認したら、再び裏向きにして、トップ・カードをだけを裏向きのまま、さきほどテーブルの上に置いたカード群の上に載せます。さらに、左手に残っているパケットを

テーブルの上のカード群の上に戻します。これで、デックは元通りの順序になりました。

⑧「お二人の方に枚数とカードを決めていただきました。それでは、さきほどまで使わなかった赤裏のデックを取り上げて、15枚目を見てください」と別の客に頼みます。客が赤裏のデックを取り上げて、15枚目を表向きにすると、♣8です。客の選んだ任意の枚数目から客の選んだカードが出て来たわけです。

[コメント]

この ACAAN は、そこそこ不思議ですが、なぜデックをこのスタックにセットして使わねばならないのか理解に苦しみます。このスタックを使わなくても、要するに、赤裏のデックと青裏のデックとが同じカード順にセットしてあれば、この手品はできます。それには、セットせずにシャッフルした一方のデックを見ながら、もう一方のデックをそろえる必要があります。これは、その都度やらなければならないので、それが煩雑に感じるとすれば、それぞれに決められたスタックにそろえるほうが簡単だということでしょうか？やってみると、前者のほうが楽なので、この理屈は通りません。したがって、Dessi がこのスタックの紹介のところで、この ACAAN の手順を解説し、それを"Linking Ring"が採用して掲載したのは手品よりも謎です。

それでは、このスタックは、あまり利用価値がないかというと、そうでもないです。なぜなら、近接した2枚のカードの一方がわかれば、もう一方のカードは容易にわかるからです。すなわち、デックをカットして、ボトム・カードを見ればトップ・カードがわかります。このことは、エイト-キングのスタックでも、サイ・ステビンス・システムでも同じことですが、仮にこの両者を知っている人が客の中にいても、このスタックなら気付かれる心配がありません。たとえば、デックをリボン・スプレッドして客に任意に1枚選ばせます。客がカードを抜き出しやすいように、スプレッドをやや拡げます（写真1004）。そのとき、客の選んだカードのすぐ上の右隣のカードを取って、そのカードで客のカードを指差しながら、「それでは、抜いたカードを覚えてください」と言いつつ、手に取ったカードの表をひそかに見ます。そのカードが仮に◇5だったら、客のカードは5＋4＝9で♠9です。客のカードの左隣のカードは♣で、5－3＝2で♣2です。そういう利点はあります。

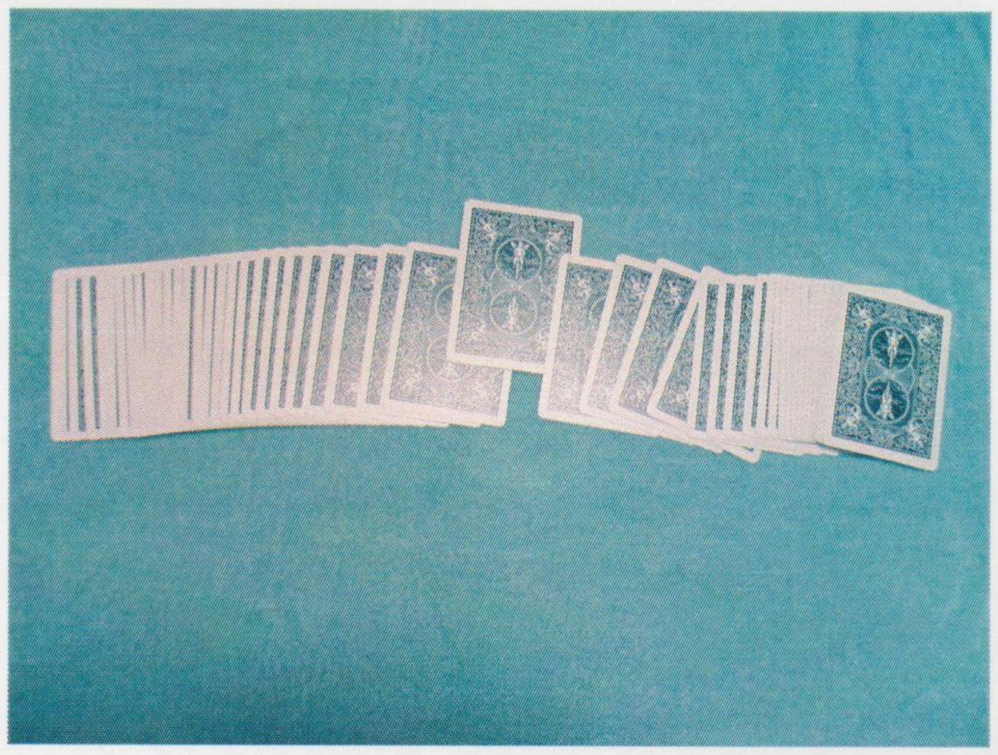


写真1004

ACAANについて（1）

麦谷眞里

（はじめに）"ACAAN: Any Card At Any Number"は、いつか取り上げなければならないと思っていて、いつまでも取り上げることのできない heavy item です。今回、Dessi's Stack で、図らずも取り上げたので、導入部分だけでも扱っておこうと思います。ACAAN は、本や小冊子はもちろんのこと、雑誌に掲載発表されたものや単売品も数多くあります。"Berglas Effect"とも呼ばれ、そのものズバリのタイトルの大部な本もあります（写真1005）。

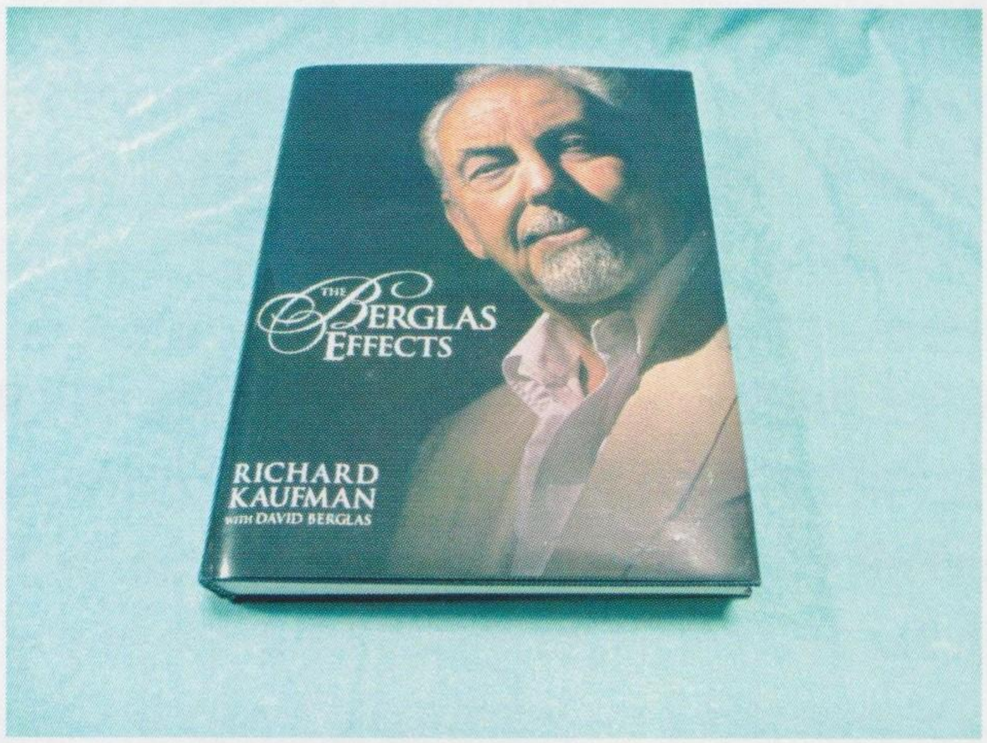


写真1005

これまでの例だと、通常、その手品の沿革や経時的な略歴を述べて、これまでに発表された主な作品の得失を比較して、その中から当該の手品のエッセンスを抽出して取り上げるのが私の手法でしたが、ACAAN は、そのようなやり方をするには heavy item 過ぎます。言わずもがなのことですが、ACAAN は、客が任意に選んだ場所（通常はデックの枚数目）から、客の任意に選んだカードが出て来る現象です。この現象を初めて聞いたとき、私は、これはてっきりホフジンサーが提起したものだと思っていました。現象を聞いただけで、奇術家なら誰でも食指が動きます。自分のやり方を考えてみようという気にさせます。実はホフジンサーではなくて、英国の職業奇術師 David Berglas の提唱したものだとわかったときは二重の驚きでした。前掲の本はリチャード・カウフマンとデヴィッド・バーグラスとの共著ですので、Berglas Effect とも呼ばれる ACAAN に関しては、これまでの歴史的な経緯の内容に本人が関わって、それにさらにカウフマンが手伝って渉猟しているのですから、過不足はありません。もちろん、この本が刊行された2011年以降に発表されたものは含まれておりません。

そこで、沿革などはバーグラス自身の記述に委ねるとして、そもそも、「バーグラス・イフェクト」はどのような条件を備えていなければならないのでしょうか？

これは、前掲の本に箇条書きになっています。

1. ノーマル・デックを使うこと。
2. デックはすでにテーブルの上に置かれているか、カードの名前と位置の数字が言われたときに、視界に入らないまったく別の場所に置かれている状態であるか、どちらかであること。もし、視界から外れていた場合は、観客が容易に持って来られる場所にあること。
3. カードも枚数の数もフォースされたものでないこと。観客は、まったく自由にカードの名前を言って、枚数目の数字も言うこと。（少なくとも、そのように見えること）
4. マジシャンはカードに触らないこと。
5. カードと枚数の数字が選ばれたら、マジシャンは、デックの上から数えるのか下から数えるのか観客に訊くこと。
6. 観客は、カード・ケースからデックを取り出し、任意の枚数目まで数え、そこから任意に選んだカードが出てくること。

これは、あくまでも David Breglas が自分に課していることで、一般にはもう少し緩やかで、次のようなことです。

1. デックは、最初に観客の目の前にあって、しかもマジシャンはデックに触れていない。
2. 観客は、52枚のカードのうちどれでも自由に選択できる。
3. 観客は、1～52までの数のうちどれでも自由に選択できる。
4. 観客がカードを数える。

このうち、もっともハードルが高いのは、マジシャンが一度もデックに触れない、という条件です。ただし、これは、Berglas も言っていますが、演技の後で振り返ってみて、マジシャンは一度もデックには触れなかったと客が思い込んでいる場合も含んでいます。したがって、厳密には、そのように見えさえすれば条件はクリアされることになります。

ACAAN をそのまま素直に考えると、たとえば、客が「♣5、23枚目」と言ったとすると、デックの上から23枚目を数え開けると♣5が出て来る、という現象です。これも不可能ではないですが、ハードルが高すぎるので、客が予め選んだカードが、デックの指定された枚数目から出て来るというのがバリエーションです。え？同じじゃないか？と思われるかもしれませんが、微妙に異なります。なお、タマリッツを含むスペインの連中の作品は今回は取り上げません。

具体的に検討します。

1. メモライズド・デック

タマリッツの「ムネモニカ」のように52枚すべて覚えているデックだったら、どこに何があるかすべてわかっているので、客のカードの位置を同定したら、あとは枚数の調整だけです。もちろん、計算して、足りない分（あるいは余分な分）のカードを足したり引いたりしなくてはなりませんが、枚数だけの話なので、一回のパスで可能です。パスしたら、デックを客に渡して数えさせます。客

の選んだ枚数目から客の選んだカードが出て来ます。

2. スタックド・デック

たとえば、前述の Dessi's Stack の場合、♠Aがトップにあるスタックを何度も使っていると、どのカードがトップから何枚目にあるかは概ね記憶しているようになります。また、ボトム・カードをブリーザー・カードにしておけば、カットする限り、いつでも元に戻すことができます。結論として、客の選んだ任意のカードの場所がわかりますから、それが何枚目なのかを把握しておけば、あとは客の選んだ枚数目との調整だけです。

と、メモライズド・デックの場合もスタックド・デックの場合も簡単に書きましたが、選ばれたカードの位置がわかったところで、それを客の指定した枚数に1回のパスで持ってくるのは、そう簡単な作業ではありません。パスはともかく、枚数の調節がすぐにはできないからです。たとえば、Dessi's Stack での具体例を挙げてみます。客が、「クラブのジャックを23枚目から」と選んで言ったとします。♠Aをトップに置いた Dessi's Stack では、♣Jは、トップから11枚目にあります。これをトップから23枚目に来るようにするには、トップ・カードの上に12枚のカードを加える必要があります。したがって、ボトムから12枚目のカード(♠10)の上にブレイクを作って、そこからパスしながら客にデックを渡せばいいのですが、この「ボトムから12枚目のカード」を探すのがなかなか難しいのです。1枚違っても失敗します。逆に、客が「♣Jを7枚目から」と希望すると、今度は、トップから4枚のカードをボトムにパスしなければなりません。こっちのほうがイージーですが、それはたまたまで、選ばれたカードと枚数目によっては、トップから10枚以上のカードをボトムにパスする必要がある場合もあります。どこから何枚のカードを移動させなければいけないかの計算は比較的瞬時にできますので、課題はデックの中から的確な枚数のカードを探り出すことです。これには、トップとボトムから10枚目のカードをそれぞれショート・カードにしておきます。そうすれば、デックの手前の端を見ただけで枚数の見当がつきます(写真1006)。

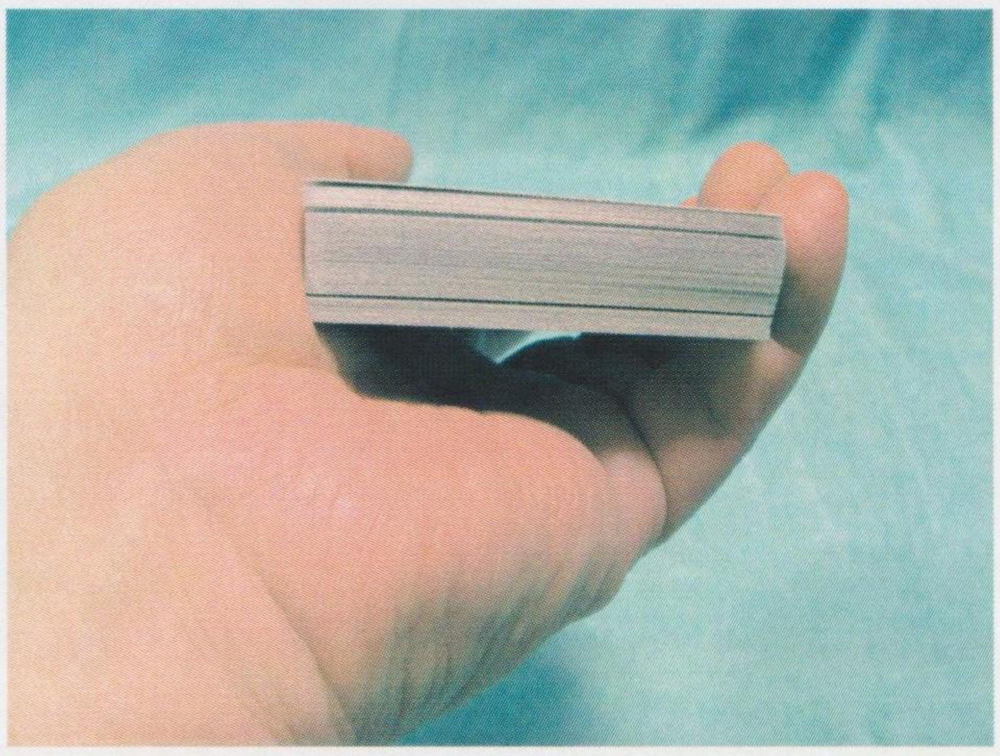


写真1006

Dessi's Stack の例で言えば、トップから10枚目(♡9)のカードをショート・カードにしておきます。さらに、ボトムから10枚目(♣K)のカードもショート・カードにしておきます。いまの例で言うと、左

手に持ったデックに右手を上からかけて、右親指で、デックの手前側の端をリフルすると、ショート・カードのところで一旦止まります。その位置で10枚ですから、さらに右親指で2枚落として、そこに左小指でブレイクを作ります。続いて、客に手を出してもらって、デックを渡す動作で、ブレイクからパスしながらデックを渡します。これで、上から23枚目に♣Jが来ています。

パスは、マジシャンの両手に動きがありますので、「見えないパス」である必要はありません。客に手を出してもらうのを促す動作の中で行ないます。これは、右手の甲をやや客側に向けて、左手のデックを右手で取り上げる動きの中で行ないます(写真1007)。

写真1007

3. Audley Walsh

1938年4月号の"Jinx No.43"に Audley Walsh が"Magician's Dream"という作品を発表しています(写真1008)。これは、もちろん、ACAAN が提唱されるかなり前のことですから、Walsh 自身は、まったく別のカード・マジックとして発表したものです。

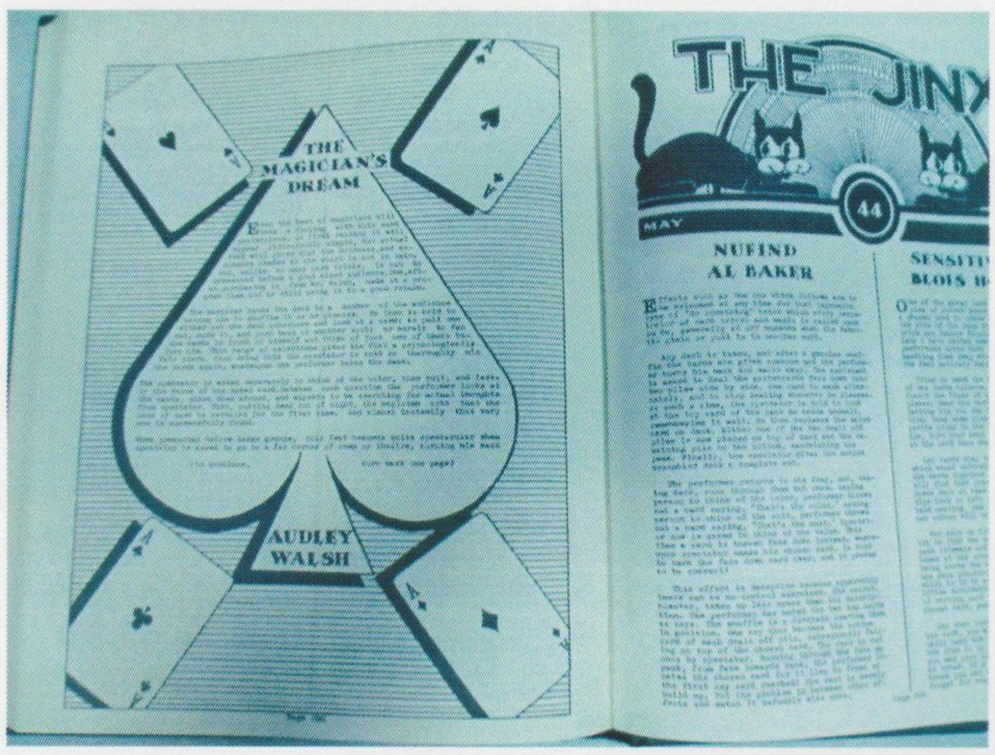


写真1008

"Magician's Dream"は、12枚のカードを4セット用意して48枚のデックを構成します。すなわち、この48枚のデックの中には同じカードが4枚ずつ含まれていて、それがくり返されます(写真1009)。

写真1009

現象としては、エイト・キングで並べた12枚を4セット用意して、この48枚のデックから、客に1枚のカードを選ばせます。このまま表を客のほうに向けてファンにして、1枚のカードを心の中に覚えてもらいます。あるいは、これはちょっと驚きますが、デックを客に渡してシャッフルさせてから、好きなところでカットさせて、そこから1枚のカードを選ばせます。普通、スタックにセットしたデックをマジシャンが自分でフォールス・シャッフルはするものの、デックを客に手渡してシャッフルさせないものですが、これは割り切っていて、とにかく12枚の中から1枚を選ばせられればいい、という考えで、これはこれで大胆な発想です。そして、客が任意に選んだカードを2，3の質問をすることによって当てて行くのです。このときのフィッシングにはいろいろな技術があって、そのこともいくつか解説してあります。いずれにしても、この段階では、ACAAN ではありません。

4. Al Koran

1959年、これを受けて、英国のハリー・スタンレイが、アル・コーランの「ミラクル・パック」を売り出します。これは、「コーラン・デック」とも呼ばれていますが、デックの基本構造は、「マジシャンズ・ドリーム」と同じ48枚から成っています。ただ、12枚のカードの順序はエイト・キングではありません。7を除く12枚のカードから構成されていて、たとえば、♠K、♡Q、♣J、◇10、♠9、♡8、♣5、◇6、♠3、♡4、♣A、◇2の12枚です。デックを表向きにファンに開いて、客に選ばせてもいいし、シャッフルした後でカットさせてもかまいません。当てるときは、できるだけ2つくらいの質問で当てます。これをさらに改良した"KORAN PREDICTION DECK"というのもありますが、今回は、これが主眼ではありませんので割愛します。

なお、本や記事によっては、この12枚4セットのアイデアは、英国のディーラー、Edward Bagshawe が1924年に彼の著書の中で発表したものだと書いていますが、世界の奇術家の眼に触れる頻度や範囲から言えば、1938年の"Jinx"に遠く及びませんので、ここでは、Audley Walsh にしておきました。また、デックを48枚の構成にして使うことは、私などは何の抵抗もありませんが、テッド・レスリーなどは、自分の著書で、数が少ないと気が付く観客がいるから、必ず、52枚にして使うべきだと言っています。

5. "Magician's Dream"の ACAAN への応用

説明の便宜上、12枚のカードを♣A～♣Qの12枚の構成とします。もちろん、実際の演技では、自分の覚えやすいように並べた4つのスートの異なる12枚のカードであることは言うまでもありません。これを4セット用意し、さらに、異なるカードを2枚加えて50枚のデックを作ります。いまの例の場合では、♣A～♣Qの12枚が4セットと♡のカード2枚とします(写真1010)。

写真1010

①デックをフォールス・シャッフルします。次いで、デックを観客のほうに表向きに拡げて、客の一人に見えたカードから1枚のカードを覚えてもらいます。この場合、「見えたカード」というのがポイントです。客は表向きで見えているカードの中から1枚を選んで覚えることに集中していますから、同じカードが4枚あることには気が付きません。結果として、客は、準備した12枚のカードの中から1枚を選んで覚えることになります。ここでは、いま準備した12枚のクラブの中から、仮に、♣7を選んで覚えたと仮定します。

②ここで、もう一度フォールス・シャッフルします。「あなたの覚えたカードが、この52枚の中のどこにあるかは誰にもわかりません」と強調します。「それでは、1～52のうちお好きな数字をひとつ言ってください」と言います。これは、カードを覚えた客でもいいですし、別の客でもかまいません。

③仮に、客が10と言ったとします。♣7はトップから7枚目にありますから、10には3枚足りません。この場合は、ボトムから3枚目のカードの上にブレイクを作り、「それでは、この一組のカードを左手に持ってください」と言いながら、ブレイクからパスして、デックを客の左手に載せます。「それでは、あなたが、選んだ数字の枚数だけ1枚ずつカードをテーブルの上に置いていってください」客に、数えながら置いていってもらい、10枚目に来たら、「それがあなたの選んだ10枚目のカードです。ところで、さきほどあなたが覚えたカードは何でしたか？」と訊きます。客は「クラブの7」と答えますから、そこで10枚目を表向きにすると♣7です。

④客が10と言った場合は、この通りですが、たとえば、25と言ったと仮定すると、トップから2枚目の♣7は19枚目、3枚目の♣7は31枚目にありますから、やり方は2つあって、まず、ボトムから6枚をパスしてトップに送ると、25枚目に♣7が来ます。逆に、トップから6枚をボトムへパ

スしても25枚目に♣7が来ます。いずれの場合も、パスしながら客にデックを渡して、客の指定した枚数目を開けてもらうことになります。

⑤いまの例の場合は、12枚のセットが♣A～♣Qだったから、♣7の位置が簡単に同定できましたが、12枚のセットが、たとえばエイト・キングであれば、この際、スートは自分がセットしたスートしかないので、スートはともかく、カードの順序は、8、K、3、10、2、7、9、5、Q、4，6、Jの通りです(写真1011)。したがって、客のカードがクィーンで、枚数目が23であったとすると、クィーンは12枚のセットの9番目なので、トップから、9番目と、21番目と、33番目と45番目に来ています。このうち、一番近いのは21番目のクィーンですから、トップに2枚加えれば、23枚目から客の覚えたクィーンが出て来ることになります。

写真1011

⑥このやり方では、12枚のスタックをバラバラにすることはできませんので、カットはできますが、客に渡してシャッフルすることはできません。また、カットした場合は、エイト・キングなら、再び8がトップに来るように戻しておかねばなりません。訓練すれば、エイト・キングの順序がサイクルに乱れても計算はできますので、カットした後、エイトをトップに戻す必要はなくなりますが、なかなかストレスです。

⑦エイト・キングは、もともと英語の語呂合わせですから、日本人には覚えにくいものです。そこで、12枚を、たとえば、◇2、♣4、♡6、♠8、◇10、♣Q、♡A、♠3、◇5、♣7、♡9、♠J、のように、スートは循環にして偶数・奇数の順番にしておくと覚えやすいですし、このデックを観客に向けて表向きで拡げても、スタックに組まれているとは気付きませんので、このまま使えます。もともと、表向きで1枚ずつ見せたり、相手にデックを表向きで点検させたりする場面はありませんので、自分の覚えやすい12枚でいいのです。

6. コメント

今回は、ACAAN のスタック版を全体の導入部分として書いてみました。一読されて、え？スタック・デックを使うのか？と思われた方がいらっしゃるかもしれませんが、IBM、SAM、FISM のチャンピオンである Rick Merrill の ACAAN は、もっとおどろおどろしいスタック・デックを使うも

のです。興味のある方は、"GENII"の2007年7月号に掲載されていますのでご覧ください。

また、masquerade 本誌でも執筆されている金沢の山崎真孝氏の ACAAN が、大阪の"THE SVENGALI"の No.21(2016年)に収載されています。これは、ジャンボ・カードで行なうもので、その分、パスなどのカード技法が封じられた作品で、観客側からすると、不思議さが増します。また、前述のスタック版で解説したような計算やカードの同定を排除して、客のカードの位置が瞬時にわかるようにカンニング・ペーパーを使うなどの工夫が施されています。惜しむらくは、観客の1人にタネがわかっても全体の手品の効果を優先するという、まさに、David Copperfield などの職業奇術師が得意とする「離れ業」を使うので、任意のカードで任意の枚数目という2つの条件のうち一方を解決するために、俄かとは言え、stooge を使うのは禁じ手を使う感じがすることです。もちろん、山崎氏は、その辺りのこともよくわかっていて発表されたのだと思います。

最後に、"FAST"という単売商品をコメントします。これは、2022年のブラックプールで即日に売り切れたと言われる ACAAN の商品です。定価は約33ドル(約4400円)です(写真1012)。

写真1012

作者は、Daniel Dorian Johnson という人で、私はこの名前を聞いたことがありませんでした。まだ、盛んに売っている商品なので詳しくは書きませんが、リバース・サイ・ステビンスとも呼んでいいスタックを使います。よく気が付いたと思います。運がよければ、マジシャンが一度もデックに触ることなく演技が完了します。欠点があるとすれば、"any number"の選び方で、1～52の何を選んでもいいわけではなく、きわめて限定的なのですが、客はそのことに気付くことなく上手に誘導されます。スタックと書きましたが、デックそのものはまったくのノーマル・デックですので、演技の後で、普通のデックとして使うことが可能です。秀逸な作品ですが、これを33ドルで単売の商品としたのにはちょっと驚きです。

これは、aficionado の Vol.6-No.7 です。
郵便の送付先:〒145－0061　東京都大田区石川町2－33－1－904　マスカレイド
E メール・アドレス:masqpart4@aol.com
これは、限定100部のうちの08／100です。　(2022年8月)